

39 36 34 32 30 27 26 24 22 連載

キッチン菜時記／飛田和緒  
 きのうのあしもと、あすの空／文〓黒田美法 絵〓鈴木千佳子  
 真宗と大拙と私／池田向一  
 唯信鈔文意を読む―唯念仏のころ／山田恵文  
 出会いの真実―嘆仏偈を読む／宮下晴輝  
 ペコロスのほどけてしゃがんで／岡野雄一  
 息でさる風景／森泉岳土  
 歌壇／永田淳 俳壇／安原葉  
 同朋のひろば

54 53 50 48 46 44 42 41 40

仏事作法のひとつま／近松誉  
 どうぼうパズルdeひとやすみ  
 録音から立ち現れる 東本願寺の「音景」／柳沢英輔  
 古写真でつづる東本願寺  
 あなたのとなりの僧侶  
 哲学者と僧侶／中山善雄  
 一切の幸せ／作〓岩川ありさ 絵〓惣田紗希  
 生きづらいこの世界でも／竹田ダニエル  
 日々平熱のソウル／中田亮

18 14 12 06 05 特集

## 陰謀論をじっと見る

「対談」魚豊×谷川嘉浩

陰謀論の快楽、フィクション・歴史・恋の熱。

分断の社会に再融和の道はあるか／鈴木大介

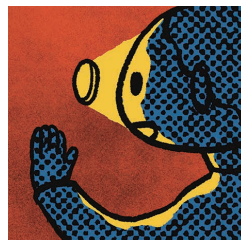
「何でも信じる」―人間の真相がそこにある。／横山茂雄

新たな身体、新たな感知の在り方を練り上げるとき。／清水知子

02

インタビュー 小田香

「われわれ」が死んだ後も、  
映画自体が「生痕」になつたらいい。



表紙絵  
北村人  
絵本作家&イラストレーター

「われわれ」が死んだ後も、  
映画自体が「生痕せいこん」になつたらいい。

おだ かおり  
小田香 (フィルムメーカー)

長編デビュー作『鉦 ARAGANE』(2015)ではボスニアの炭鉱、  
二作目の『セノータ』(2019)ではメキシコの洞窟内にある泉など、  
「地下」を題材に映画を制作してきた小田さん。

今月公開の新作『Underground アンダーグラウンド』では、  
3年かけて日本各地をリサーチ、土地に宿る記憶や歴史を探求。  
そこに映し出される世界、作品に込めた思いをお聞きました。



## 人の手には いろんな表情がある

——『鉞ARAGANE』『セノーナ』に  
続く、「地下三部作」の三作目『Underground』は、どのようなプロセ  
スを経て作られたのでしょうか？

制作としてはブロック分けみたい  
な感じでした。一つのところに赴い  
て、そこで撮ったものを一回編集し  
て、何が足りないかと課題が出て  
くるので、また次の場所を決めてい  
く。『Underground』というプロジェ  
クトとして、それを3年くらいやっ  
ていました。

まず、「札幌編」がありました。札  
幌文化芸術交流センターSCARTS  
との仕事で札幌の地下歩道にある映  
像インスタレーションを制作する縁  
の中で、札幌の地下鉄や雨水道など  
を撮影させてもらいました。

「沖縄編」は、大阪の豊中市立文化  
芸術センターとの仕事があつて、豊  
中市の兄弟都市である沖縄市のガマ  
に行くということになり、それなら  
ガイドの人に付いてもらったほうが  
いい、語りも聞いたほうがいいとい  
うことで、平和ガイドと遺骨収集を  
している松永光雄さんにくつつかの

ガマの中に連れて行ってもらいま  
した。よそから沖縄に行つて何が撮れ  
るのだろうと思つていたのですけど、  
『Underground』プロジェクトでやっ  
ていたのは人間が生きた痕を記録す  
るということだったので、ガマを案  
内する松永さんが提示してくれるも  
のだったら映画に落とし込めるんじや  
ないか、と。沖縄編は『GAMA』  
という独立した作品になり、その一  
部は『Underground』にも使つてい  
ます。他にもいろんなところで撮影  
を続けて長編になりました。

——まず印象的だったのは、地下に潜  
む記憶に触れるかのように何度も伸  
ばされる手やその影が映る場面です。  
手はいろんなことを思い出させ、  
感じさせてくれますよね。いろんな  
表情を持っています。今作の制作が  
決まったとき、人類の歴史というか、  
とても長い時間を感じさせる映画に  
したかったので、太古の時代、洞窟  
に人が生きた証として何があつたか  
など考えました。そのとき浮かんだ  
のが、フランスのある洞窟に人間の  
手形がベタベタと残されているとい  
うことで。当時の人が何を思つて自  
分の手形を残したのかは分からない。  
でも手の痕があるってことは、「こ

こにいたよ」ということじゃないで  
すか。そこにあるわれわれの痕、生  
痕と言ふんですけど、その生痕に触  
れるというジェスチャー自体が自分  
には大事で。あと、影の手が壁画の  
手形のように見えて面白いんじゃない  
かというのがありました。

## 地下での体験を 身体に入れていく

——多くの人々が命を奪われた沖縄  
のガマで、松永さんが戦時下の記憶  
を語る場面がありますね。主演の吉  
開菜央さんが青い服を着て、地下を  
彷徨う「影」というキャラクターと  
して姿を現します。一方、お味噌汁  
を作ったり、ヨガをしたり、地下空  
間ではない日常生活を送る、白い服  
を着た吉開さんの場面もあります。

断片的な地下の映像だけをつない  
だら、観ている人と接続しにくくな  
るかな、という懸念がありました。  
吉開さんの身体性が、ある種の媒介

となつて映画自体を引っ張っていく  
んですけど、彼女が地下を彷徨つて  
いるときは、足音があまりなかった  
り、重力を感じていないような存在  
として出てもらったんですね。だか  
ら、日常生活を撮ることで彼女の身  
体を彼女に返すというか、バランス  
を取りたいと思いました。

——地下鉄の走行音や、雑草の揺れ  
る音など、音が重要な場面もありま  
した。海辺で遺骨のように見える白  
いサンゴのかけらを打つて音を出し  
ていると、突然上空を飛ぶジェット  
機の爆音が侵入してきたシーンでは  
沖縄の暮らしの一端に触れたように  
感じました。

たとえば、ジェット機の爆音、ガ  
マの暗闇などを映画という表現を通  
して観る人と共有する。そういった  
ことがわたしの仕事じゃないか、と。  
つまり、自分たちが今回取り組ん  
できたのは、地下に潜んでいるとい  
うか、隠れている小さな声、見えづら  
い記憶に実際に触れたり、聴いたり、

洞窟に手の痕が残っているってことは、  
誰かが「ここにいたよ」ということ。

続きは本誌でどうぞ

特集

# 陰謀論を

# じつと見る



現実が信じられない。ほんとうのことが知りたい。

そんな欲求をもつとき、

私たちはときに思いも寄らない暗がり、

陰謀論の世界に足を踏み入れる、のかもしれない。

伝統宗教、新聞・テレビなどの〈権威〉が疑われる現在、

陰謀論とはどんなものか、なにが人間を引き寄せるのか、  
特集します。

# 陰謀論の快樂、 フィクション・歴史・恋の熱。

— 対談 —

魚豊うおと (漫画家)× 谷川嘉浩たにがわよしひろ (哲学者)

## 陰謀論と恋愛

**谷川** はじめまして。昨年は拙著の帯に『チ。―地球の運動について―』（小学館の一コマを使わせてもらったり、トリビュート本にも寄稿させていただったりしました。それをきっかけに本を手を取ってくれた人がかなりいて、感謝しています。今回お話しする機会をいただけてうれいす。

**魚豊** こちらこそ光栄です。ありが

とうございます。

**谷川** 魚豊さんの作品は『ひやくえむ』（講談社）から読んでいます。その後、地動説がテーマの『チ。』の連載が始まり、その次に陰謀論をテーマにした『ようこそ！FACT（東京S区第二支部）へ』（小学館）を描かれています。『FACT』を描く際には、陰謀論という論点と併せて、恋愛というトピックがあったそうですね。

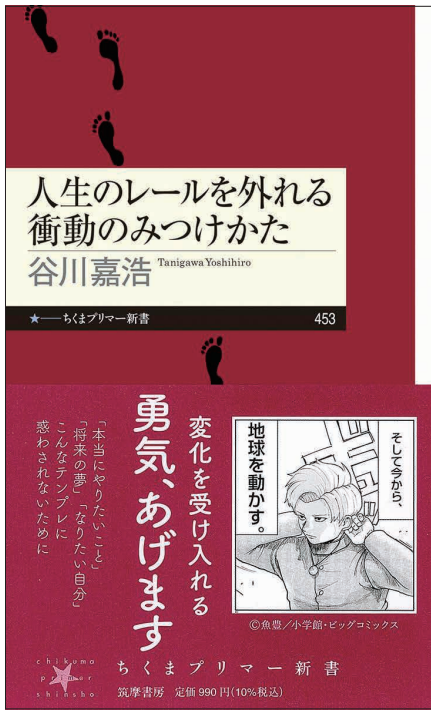
**魚豊** 2021年にあったアメリカ合衆国議事堂襲撃事件やQアノンの問題で陰謀論には関心をもって

たのですが、それをどう物語にしようかなと考えあぐねていたときに、『現代思想』の特集「陰謀論」の時代（2021年5月号、青土社）を読みました。そこで元『毎日新聞』記者の石戸論いしどろんさんの論稿の「陰謀論に陥っている人たちというのは、認知バイアスの根本的帰属の誤りに陥っていて、簡単に言うくと、めっちゃ勘繰りすぎちゃうことだ」みたいな一文を読んだときに、これは恋愛と似ているなって思ったんです。恋愛は、LINEの一行とか、相手の言葉や身ぶり手ぶりとかを勘繰っていく

ようなところがありますよね。それとパラレルに考えていけば、ある程度の長さの物語にできるかなと思っただけです。

**谷川** 『チ。』と『FACT』を続けて描かれているのは、すごく面白い並びだなんて思います。というのも、オチが真逆に読めるわけですよね。主人公が世のなかに対して勝利する話と、そうじゃない話。

**魚豊** その二つは真逆の作品というか、アンチテーゼみたいな作品を描きたいなという連続性は自分のなかにあって、『チ。』は、疑うことを肯



『人生のレールを外れる衝動のみつけかた』

著者／谷川嘉浩  
発行／ちくまプリマー新書  
定価／990円(税込)



『チ。—地球の運動について—』(1)

著者／魚豊  
発行／小学館  
定価／770円(税込)

定する話だったので、次は信じることを肯定する話を描きたいなと思いましたが。ただ『チ。』は、天動説を疑い地動説を証明しようとする話ですが、作中でその疑いは「異端的」

として強烈に否定されていきます。だから『FACT』でも、信じる気持ちは絶対に否定できないんだと語っていくと同時に、信じることのリスクも併せて描いたつもりです。

### 「信じること」は否定できない

**谷川** 陰謀論って結構否定しづらいところがあるなと思います。例えば「ウォーターゲート事件」<sup>\*</sup>って、実際に陰謀があったわけですよね。だから、陰謀論的な思考は間違っているとしてを切り捨てることはできない。さらに、『FACT』の主人公がまさにそうであるように、真面目に調べ、考え、今ある自分を何か別の自分に変えていこうとする思いで陰謀論にはまりこんでいく。あの真面目さや切実さ自体は、否定していいものではないと思うんです。

**魚豊** 陰謀論の場合、信じること自体はいいんだけど、その対象は間違っているかもしれない。でも、信じるという姿勢自体は、対象が正しくても間違っても、実は差があまりないのかもしれない。

作家は、実は陰謀論的な能力がものすごく必要になる仕事です。エンタメ作品だと特にそうですが、目の前にあるいろんな情報をつなげて、一本の筋をつくって、「でも真相は

こうだったんだ」みたいなツイストを利かせていく。例えば三段論法みたいな、こうなったら、こうなって、こうだよ、という論理展開のドラマイブ感や面白さってありますよね。人間がそれを面白いと思ってしまうというのが、陰謀論にはまっていく理由でもあるでしょう。

**谷川** 物語の創作だけでなく、研究や批評も、実は思考法は陰謀論に近しいと思ってるんです。作品に対して真摯に付き合っていると、物語のメインライン(本筋)だけじゃなくて、作家がなんとなく描いた小道具やディテールが作家が想定する以上に雄弁なメッセージを発すること、つまり描かれている以上のものを語ってしまうことはよくあると思ってる。そこに目を向けるのが批評家の仕事なんですよね。

それは、恋人が意図なくやったちよつとしたしぐさみたいなものを、過剰に解釈するということにもすごく似ているし、陰謀論者が「メディアが今回はあのニュースを取り扱わなかったぞ…これは陰謀だ!」と、あらゆることにメッセージを感じるのとも似ています。

続きは本誌でどうぞ

<sup>\*</sup>ウォーターゲート事件…1972年にニクソン大統領再選を目論む共和党関係者がウォーターゲート・ビルの民主党本部に盗聴目的で侵入、この事件への政権の関与が暴露され、74年にニクソンは大統領を辞任するに至る。この一連の政治スキャンダルのこと。

インタビュー

## 「何でも信じる」——人間の真相がそこにある。

横山茂雄（文学者）

——横山さんの『聖別された肉体 オカルト人種論とナチズム』（1990年）は、ナチスのユダヤ人虐殺に至る歴史にオカルティズムという隠れた水脈があったことを論じる研究書です。ナチス、オカルトと聞くと「良識」ある方は眉をひそめますが、「○○人は絶滅すべき」といった民族至上主義的な人種論がどのようにして生じたのかは現在も古びていない課題です。

同書で取り上げられるナチスの高官、アルフレート・ローゼンベルクの『20世紀の神話』はアーリア人の純血を謳う人種主義的書物で、戦時下の日本でも翻訳され、真宗大谷派の学僧、金子大榮は「読んでおりませぬ」（『正法の開顕』、1942年）とは言うものの書名には言及、論考「皇国仏教学

序説」（1944年）には「我等（編注、「日本人」のこと）の歴史的感覚は、常に祖先より伝統せる血液によりてせらるる」などと、アーリア人の「血液」を重んじた『20世紀の神話』と非常に似たことを書いています。陰謀論のような一見荒唐無稽な発想であっても、簡単に他人事にできない何かを私たちは抱えているようです。

\* \* \*

陰謀論は  
私たち人間の産物

金子の名前は知っていましたが、「血」に着目するというのは仏教では珍しいですね。私が『聖別された肉体』で書いたのは、

オカルトと結合した過激な人種論は、ナチスという「絶対悪」とも言われる体制が倒れたことで本当になくなったのかと。それが人間から出てきたものである以上、復活しないとも限らないわけですね。



『増補 聖別された肉体  
オカルト人種論とナチズム』  
著者／横山茂雄  
発行／創元社  
定価／4,180円（税込）

昨今では立憲民主党などリベラルと目される政党にも、ディープステートという影の勢力が世界を操っているという陰謀論を信じる議員がいます。また現在、衆参あわせて四議席を獲得している参政党は排外主

義的な主張と共に有機農業の促進などを政策の柱に掲げており、党員や支持者にはマクロビオティックに共感する人がそれなりにいるようです。マクロビオティックとは「玄米正食」を軸とした健康法で、創始者の桜沢如一<sup>さくらざわ いちく</sup>はかつてヒトラーを絶賛し、西洋近代医学を「ユダヤ医学」と呼称して排撃した人物。『人間の栄養学及医学』（1939年）ではコレラ菌をコップに一、二杯飲んで「正食」で鍛錬された者は平気、といった主張をしていました。

## 『X-ファイル』と『マトリックス』

『聖別された肉体』、その後に出した『何が空を飛んでいる』（1992年）の当時、あくまでも陰謀論はキリスト教などの西欧精神にもとづくものであって、西欧精神が存在しない日本ではそれほど流行しないように考えていましたが、陰謀論を信じる政治家が落選するわけでもなく、一定の支持を集める現況を考えると、陰謀論が今後拡大していくと考えるのは自然かもしれません。『何が空を飛んでいる』では、「空飛ぶ円盤」の現象をめぐるアメリカで展開した、UFOに関する陰謀論を扱いました。

政府がUFOや宇宙人などの情報を隠しているという、いわゆるカバーアップ陰謀論が80年代に活気をみせますが、基本的には社会のまさに辺境に位置づけられる動きでした。でも、『X-ファイル』（1993〜2003年）というTVドラマがありましたね。FBI捜査官が科学的に説明のつかない未解決事件に挑む物語で、ドラマの根幹にあるのが先ほどの陰謀論。アメリカ社会には中央政府への不信感が根強くあるのです。そんな発想が出てくるのですが、陰謀論が90年代なかばにポップカルチャーのご真ん中に現れたわけですね。



『定本 何が空を飛んでいる』  
著者／横山茂雄（福生平太郎名義）  
発行／国書刊行会  
定価／3,520円（税込）

映画『マトリックス』（1999年）の影響も大きい。学生などに聞くと、この現実も虚構に過ぎず、それと別に本当の現実があるという設定が新鮮だったらしい。そんな考え方に映画で初めて接した、と。文学や哲学、宗教が入口ではないわけです。同年公開された『イグジステンズ』は現実と虚構に絶対的な区別はないという話で、それ

と比較すると『マトリックス』は現実と虚構の二項対立がある分かりやすい作品です。

## 陰謀論版「三種の神器」

そもそも陰謀論は昔からオカルトとの相性はいい。ときに陰謀論を批判する人はそんな言説を信じる人をハナからバカにしますが、オカルトと言ってもさまざま。たとえば、引き寄せの法則、ポジティブ・シンキングは19世紀の信仰治療などに由来するニューソートと言われる考え方で、オカルトと根っこはつながっています。簡単に言えば、努力すれば報われるという現世利益の強みはバカにできないわけです。

オカルト雑誌として悪名高い『ムー』の顧問、武田崇元<sup>ただすけ</sup>さんと対談した際、彼は「陰謀論は真面目に人生を送ってない人がひっかかる」（『霊的最前線に立て！』、2024年）と意外にもド正論を語っていましたけれど（笑）、私からすれば、現世利益どころか「できれば楽したい」というのが人間の、人生の実相であってね。

西洋には反ユダヤ主義の長い歴史があるので、陰謀論は当然、人種論とも結びつき、19世紀なかばには極端なものになっていき

続きは本誌でどうぞ



# 息でできる風景

19

森泉岳土

## 英会話ワンダーランド

先月につづき英語のはなしなんですが、英語とさほど縁のない暮らしをしていても、「ああ、ここで英語ができたらな」という機会がたびたびあるものだ。

先日、台湾のマンガ家さんと交流する機会があった。

ぼくがしどろもどろの英語でなんとか会話をしているなか、ほとんど英語を喋れない友人の日本人マンガ家さんが積極的で、彼女がすごかった。腰が痛いというところ「アウチ・バック」と表現し、「銀杏を食べすぎると体調をこわす」というところで「ギンナン・オーバードーズ」と言い切った。

ほくも台湾人もみんな笑ってしまったが、でもしかし、お

見事だ。コミュニケーションをとることが目的なので、目的は達成しているわけだ。

「日本にはマンガの博物館ってあるんですか？」

台湾のマンガ家さんが英語でそう尋ねた。いくつかあるけど、川崎のそれは豪雨で保管物が水没してしまったよねと日本人同士で話したあと、彼女はこうまとめた。

「イエス、アンダー・ウォーター」

もりいずみ・たけひと ● 1975年生まれ。マンガ家。主な作品に『佐々木奈々の究明』(小学館)など。最新作にスタニスワフ・レムの原作をマンガ化した『ソラリス』(早川書房)がある。



「もう少しやらせてみよう」って人もいる  
「裁判の結果を待とう」って人もいる  
大統領を弾劾しよう  
大統領を弾劾しよう

“Impeach The President”  
The Honey Dipppers, 1973.

トランプがふたたびアメリカの大統領に就任しましたので、なにかと第一次トランプ政権の頃のことを思い出します。

映画監督のスパイク・リーが、アメリカに深く根を下ろす白人優越主義をテーマとして『ブラック・クランズマン』を監督し、僕は日本で公開するにあたっての字幕制作のお手伝いをしました。2019年のことです。

映画配給会社のみなさんや字幕翻訳家の方と作業をすすめていたとき、どなたかがこんなことをおっしゃいました。「いやあ、トランプが大統領になったおかげで、政治は悪くなっただけかもしれませんが、そのぶん、よい映画がどんどんつくられていますね」。

その場合は苦笑して済ませましたが本当にそのとおりで、映画界にかぎらず、音楽やら文学やらの方面でも政治をテーマにした意欲作が多く作られ、業界は「活気づいて」いたように思います。

第19回

## 日々平熱のソウル

中田 亮

### トランプのおかげではない

云うなれば、スパイク・リーは「トランプのおかげ」で念願のアカデミー賞やカンヌ映画祭優秀作品賞に選ばれもしたわけですし、僕ごときも「トランプのおかげ」で、久しぶりに映画字幕のお仕事に声がかかりました。

そのほかにも、あのころにはトランプ政権や安倍政権を批判する演劇に参加して音楽を担当したり、音楽家としてはとても充実した日々を過ごしたのです。

この矛盾にすくなからず頭が混乱してしまいます。ファシズム、ポピュリズムが世界を席卷し、それによって仕事が増える——こんなとき一体どんな顔をして引き受けたらよいのでしょうか。

モヤモヤは数ヶ月つづきましたが、あのバンドのライブを観て、頭がすっきり、霧が晴れたような気がしました。

そのバンドは残念ながらすでに解散してしまっただ「代田橋ユナイテッド」というグループで、ゴーゴーと呼ばれる音楽スタイルをとり、とくに外国人差別をする者を叱り飛ばしたり昨今の政治腐敗を批判したりする人たちでした。

あれは夜中の三時くらいだったか、ヒップホップというのかハウスというのかテクノというのか、そんな音楽が大音量で流れている暗い地下階のお店で、水を得

た魚のように、差別に対する怒りを歌に込めて恐怖の時代に嬉々として呼応するかれらを観ました。また、その音楽に合わせて楽しそうに踊る人たちを見ました。

僕は納得がいきました。映画やら音楽やらに携わる人は火事とたたかう消防士さんや泥棒を追いかけるお巡りさんのごとく、または公園のゴミを拾う大人のごとく、社会を破壊する者があらわれたときには気炎万丈に登場し、腕をふるわなくてはいけないのです。遠慮は要りません。自分の出番がやっと回ってきたとばかり、出掛けてゆくのにも少顔がほころんでも罰当たりでも何でもない。

これは表現を生業とする者にかぎったことではなく、韓国で昨12月におきた戒厳令解除行動を範として、民主国に住む大人なら誰でもいつでも、何かあったときには意気揚々とおもてへ出て行くべきでしょう。



“Impeach The President” ROY C FAMILY, 1994.  
（“Impeach The President”収録）

#### なかたりょう

1972年大阪府生まれ。ミュージシャン。ファンクバンド「オーサカ＝モノレール」のボーカル担当。アフリカ系アメリカ人の文化を扱った映画の字幕監修や翻訳なども手がける。